

琉球大学学術リポジトリ

無力感とソーシャルサポートとの関連性に介在する 統制感の効果

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター 公開日: 2008-11-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前原, 武子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8211

無力感とソーシャルサポートとの関連性に介在する統制感の効果

前原 武子*

The Effects of Perceived Control on Relationships between Helplessness and Perceived Social Support

Takeko MAEHARA

ある人を取り巻く重要な他者（家族、友人、同僚、専門家など）から得られるさまざまな形の援助、すなわちソーシャル・サポート（social support）が、その人の健康維持・増進に十分な役割を果たすことが注目されている（久田，1987）。

児童・生徒が示す心理的ストレスもソーシャル・サポートによって軽減されることが、数少ないながら、実証されるようになった。

Furman & Buhrmester (1985) や Reid, Landesman, Treder, and Jaccard, (1989) は、小学生が、自分のサポートネットワークをどのようにとらえているか検討した。また、Dubou and Tisak (1989) は、3-5年生を対象に、ストレス（転居、親の死亡、離婚など）が強いほど問題行動が多いこと、しかし、その関係は子ども自身が報告するサポートの多い群より少ない群で強いことを見出した。

わが国では、森と堀野（1997）が、小学生を対象として、絶望感がサポートと負の相関関係にあることを報告している。また、岡安・嶋田・坂野（1993）は、中学生を対象に、各種学校ストレス（教師、友人、不活動、学業）による各種ストレス反応（不機嫌・怒り、抑うつ・不安、無力感、身体的反応）がサポートによって軽減されることを報告している。興味深いことに、それら両研究は、サポートの有効性がサポートの内容やサポート源によって異なるばかりでなく、サポートを受ける側の属性によっても異なることを見出した。森と堀野（1997）は、ソーシャルサポートが有効に働くための介在要因として達成動機の個人差に注目し、自己充實的達成動機が高い児童がサポートを有効に活用できること、競争的達成動機は介在要因として有効でないことを見出した。また岡安ら（1993）は、男子においては、女子ほど、サポートが有効にはたらかないことを見出し、サポート以外の要因について検討する必要性を指摘した。

House (1981) も指摘するように、サポートが送り手と受け手の相互交渉であることを考えると、送り手はもちろん、受け手の属性に焦点を当てた研究が必要である。本研究は、受け手の属性、特に、パーソナリティ属性の1つである統制感を取り上げて検討する。Rotter (1966) は、統制の所在 (locus of control) というパーソナリティ変数を定義した。すなわち、自分自身の行動が、ある成果や結果をもたらすという期待を内的統制と呼び、逆に、結果の生起に自分の行動以外の外的な力が左右するという期待を外的統制と呼び、その違いが行動を予測するという。類似した概念が、

*琉球大学教育学部 学校心理学科

feelings of personal control, perceived control, sence of control, perception of control, などの用語で強調されてきた。まさに自分自身の力が結果を左右するという期待や、感情、知覚などを含めて、ここでは、便宜的に、統制感（perceived control）の用語を使用する。神田（1993）は、小・中学生対象の統制感尺度を作成し、統制感の高低と適応感・不適応感とに対応関係があることを見出した。この結果に基づくならば、統制感とストレスは負の相関関係にあることが予想される。では統制感とサポートではどちらが有効に作用するのだろうか。ストレス対処は、サポートさえあれば可能なのだろうか、あるいは、たとえサポートがなくても、個人の統制感によって可能なのだろうか。その疑問を解決することが本研究の主な目的である。特に、岡安ら（1993）が見出した無力感に対するサポート効果の性差に注目し、無力感に対するサポートと統制感の効果に関する性差を明らかにしたい。

方 法

2. 無力感の測定

1. 調査対象

那覇市内M小学校の5年生（男子76名、女子79名）と6年生（男子87名、女子63名）、計305名。そのうち、記入漏れなどのものを除き、5年生150名（男女各75名）、6年生143名（男子81名、女子62名）の計293名を分析対象とした。

岡安ら（1992）が使用した中学生用ストレス反応尺度の無力感尺度12項目を参考にしながら、小学生に適用可能な11項目を作成した。そのうち、6項目は逆転項目であった。「とてもあてはまる（4点）」、「かなりあてはまる（3点）」、「少しあてはまる（2点）」、「全くあてはまらない（1点）」の4段階で評定を求め、得点が高いほど無力感が高いことを表す。項目は表1に示した。

表1 無力感測定尺度

-
- ①. じゅぎょう中、勉強することが楽しい。
 - ②. ひとつのことに集中することができる。
 - ③. だれと話しても楽しくない。
 - ④. いつも元気いっぱいである。
 - ⑤. いやなことをされても、もんくを言う気がしない。
 - ⑥. 何に対してもやる気がある。
 - ⑦. 一人でじっとしていたい。
 - ⑧. むずかしいことを考えることが好きである。
 - ⑨. 何もかもいやだと思う。
 - ⑩. 未来に希望を持っている。
 - ⑪. 学校に行く気がしない。
-

○印逆転

3. ソーシャル・サポートの測定

岡安ら（1993）、堀野ら（1992）によって作成された尺度をもとに、小学生用の表現に修正

した14項目を使用した。項目は表2に示した。

この尺度は将来何か問題が生じた場合に、周囲の人々からどの程度の援助が期待できるかを調べることを目的とした尺度であり、各項目に

対し、4つのサポート源（父親、母親、友人、先生）別に、将来どの程度の援助が期待できるかについて、「ぜんぜん〇〇してくれない（1点）」「あまり〇〇してくれない（2点）」「すこし〇〇してくれる（3点）」「とても〇〇してくれる（4点）」の4段階で評定を求め

るものである。友人については、同性・異性の区別は行わなかった。父親や母親がいない児童については、その項目に×印をつけるように求めた。合計得点が高いほど、サポートの期待が高いことを表す。

表2 ソーシャル・サポート測定尺度

1. あなたがだれかにしかられたら、なぐさめてくれる。
2. あなたが良い成績をとったり、試合に勝ったりしたら、喜んでくれる。
3. あなたにいやなことがあったら、真げんに聞いてくれる。
4. あなたに何かうれしいことが起きたとき、自分のことのように喜んでくれる。
5. あなたがテストや試合で失敗したら、はげましてくれる。
6. あなたが病気になったり、けがをしたりしたら、心配してくれる。
7. あなたが困っているとき、助けてくれる。
8. あなたがけんかしたり、いじめられたりしたら、助けてくれる。
9. あなたが遊びたいとき、いっしょに遊んでくれる。
10. あなたに一人ではできないことがあったら、手伝ってくれる。
11. あなたに勉強などについて、わからないことがあったら教えてくれる。
12. あなたが何か話をしたいとき、聞いてくれる。
13. あなたに元気がないとき、はげましてくれる。
14. あなたの気持ちをわかってくれる。

4. 統制感の測定

神田（1993）によって作成された26項目のうち、項目分析の結果をもとに11項目を選択した。各項目は、「とてもあてはまる（4点）」

「かなりあてはまる（3点）」、「少しあてはまる（2点）」、「全くあてはまらない（1点）」の4段階で評定を求めた。11項目中5項目は逆転項目とした。合計得点が高いほど、統制感が高いことを表す。尺度項目は表3に示した。

表3 統制感測定尺度

- ①. 自分は何をやっても、だめな人間だと思う。
2. 自分が努力すれば、少くくクラスを良くすることができると思う。
3. みんなから悪いことにさそわれても、自分にはことわる勇気がある。
4. みんなから反対されても、言うべきことは言い通す自信がある。
- ⑤. むずかしいことやめんどろなことは、すぐにあきらめてしまうほうだ。
6. がんばれば、自分は社会に役立つ人間になれると思う。
- ⑦. 学校では先生たちに何か言いたい、と思ってもあまり言えない。
8. いろいろ先のことまで考えて計画を立てるのが好きである。
- ⑨. 勉強のできる人は、生まれたときからできるようにきまっている。
- ⑩. 友だちができて、ずっとなかよくする自信はない。
11. いっしょうけんめいやっていけば、まわりの人が味方になってくれると思う。

○印逆転

結果と考察

1. 尺度の検討

1) 無力感について

無力感尺度の各項目と、その項目を除いた項目の合計点との相関を出したところ、全項目が、.28から.59の有意な相関を示し、妥当性が確認された。また、 α 係数は.64であり、高くはないが、ある程度の信頼性が確認された。

性差を検討したところ、有意差は確認されなかった（男子：21.26，女子：21.40）。中学生を対象とした岡安ら（1993）も無力感に関しては性差を見出していない。

2) ソーシャル・サポートについて

まずソーシャル・サポート測定尺度の各項目と、その項目を除いた項目の合計点との相関を算出したところ、.52から.80の高い相関が得られた。またサポート源別に主因子法、バリマックス回転による因子分析を行ったところ、全ての項目が第1因子において.50以上の高い負荷量を示した。したがって、サポート源別14項目の合計得点をサポート得点とした。図1は、サポート源別の平均得点を性別に示したものである。

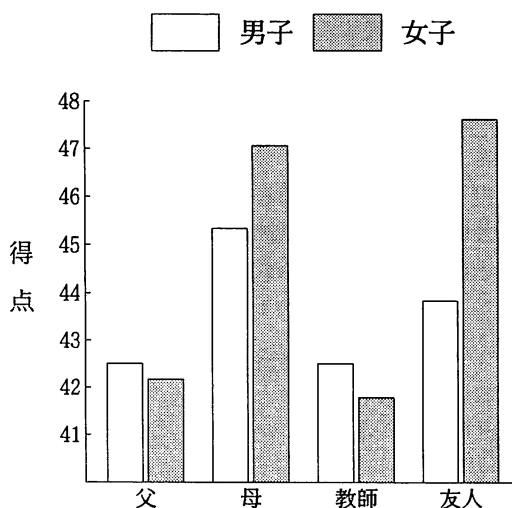


図1 性別・サポート源別得点

母親サポートと友人サポートの得点が高いのに対し、父親および教師サポートは低い得点を示した。また、友人サポートにあっては、有意な性差（女子 > 男子， $t=4, 43, p < .01$ ）があり、母親サポートでは有意傾向（女子 > 男子， $t=1, 89, p < .1$ ）が見られた。小学生を対象とした先行研究（Furman & Buhrmester, 1985；森と堀野，1992；Reid, et al., 1989）は、父親、母親、友人いずれのサポートもほぼ同程度の期待を示すことを報告している。一方、岡安ら（1993）による中学生は、母親 > 友人 > 父親 > 教師サポートを示し、また母親と友人サポートだけで、女子が男子より高い期待を示した。本研究の被験者は、サポート源の分化が進んだ、中学生にほぼ近い特徴を示したことになる。

3) 統制感について

統制感尺度の各項目と、その項目を除いた項目の合計点との相関を出したところ、全項目が、.34から.58の有意な相関を示した。また、 α 係数は.65水準にあり、ある程度の内的整合性が認められた。

性差を検討したところ、有意差は見られなかった（男子：32.11，女子：32.02）。神田（1993）も有意な性差を見出しておらず、斉合性がある。

2. 無力感とソーシャルサポート、統制感との関係

表4は、無力感、サポート、統制感相互の相関係数を性別に算出した結果である。無力感がサポートおよび統制感と負の相関関係にあり、サポート、統制感いずれも、その度合いが高いほど無力感は低くなることが分かる。また、男子においては、統制感と.7、サポートと.4の相関であるのに対し、女子においては、統制感およびサポート、いずれとも.6台の高い相関であることから、男子においてはサポートより統制感の果たす機能の高さが注目される。

そこで、ソーシャルサポートと統制感が無力感にどれほどの影響力をもつのか明らかにする

表4 変数間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7
1. 無力感		-.46	-.38	-.31	-.26	-.42	-.70
2. 父	-.51		.71	.61	.43	.86	.44
3. 母	-.45	.74		.52	.40	.81	.44
4. 教師	-.55	.51	.45		.52	.81	.36
5. 友人	-.32	.33	.38	.42		.73	.30
6. 全サポート	-.60	.85	.83	.77	.64		.44
7. 統制感	-.63	.50	.38	.45	.28	.53	

右上：男子，左下：女子

ために偏相関係数を算出した。その結果を示したものが表5である。男女ともに、統制感と無力感の相関は、女子の教師サポートをのぞく、いずれのサポート源のそれを凌ぐものであった。この結果は、たとえサポートが弱くても、統制感が無力感を低減することを示している。堀野と森（1991）は大学生の抑鬱に対して、また、森と堀野（1997）は小学生の絶望感に対して、達成動機がソーシャルサポートより有効に機能することを見出した。また、川西（1995）は、大学生を対象に、セルフエスティームがストレス反応を予測する重要な要因であることを報告している。本研究は統制感の個人差がソーシャルサポートよりストレスに有効に機能することを見出したことになる。さらに、男子で統制感の無力感に対する負の大きな関連性が見出され、この結果は、岡安ら（1993）の男子が示した弱いサポート効果を説明する1つの材料を提供するものでもあろう。

また、本研究は、サポート源の効果に関して興味ある結果を得た。まず、その1つは父親サポートの特徴である。父親サポートは母親サポートより低く認知されたが、無力感との関連性は、表5から、男女ともに、母親サポートとほぼ同程度のものであることが分った。岡安ら（1993）は、中学生における学校ストレス反応のうち、特に女子における無力感に対する父親サポートの高い効果を見出したが、本研究は、

その効果が男女ともに期待されることを示唆する結果を得たことになる。

表5 無力感、ソーシャルサポート、統制感の偏相関数

		ソーシャルサポート	統制感
男 子	父	-.27	-.54
	母	-.26	-.52
	教師	-.21	-.55
	友人	-.17	-.56
	全サポート	-.17	-.63
女 子	父	-.39	-.45
	母	-.38	-.44
	教師	-.47	-.41
	友人	-.23	-.52
	全サポート	-.37	-.52

第2に、友人サポートの特徴である。友人サポートは母親サポートと同程度に高く認知されたが、無力感との関連性は、男女ともに、最も低いものであった。森と堀野（1997）は、小学生における絶望感に対する友人サポートの高い効果を見出したが、その結果を本研究は十分支持するものではない。第3に、教師サポートの特徴を指摘することができる。教師サポートは、サポート源の中で最も低く認知されたが、無力感との関連性は、特に女子において最も高く、それは統制感を凌ぐものであった。男子も女子同様に、教師からのサポートをあまり期待しないけれど

も、期待する子どもほど無力感は低いことが、確認された。現在、学校不適応児に対する教師の力量が問われているが、本研究結果は、教師からの情緒的サポートが子どもの無力感低減に大きな効果をもつことを示唆するものである。

本研究は、ソーシャルサポートと無力感との関連に介在する統制感の効果を明らかにした。しかし、統制感の強い者が、実際の日常生活の中で出会う有害な出来事をどのように認知し、それに対してどのような対処を行い、その結果どの程度無力感を軽減しているのか明らかでない。今後、その過程が明らかにされなければならない。また、本研究は、ソーシャルサポートの期待とその機能の違いを明らかにした。それは、岡安ら（1993）が指摘するとおり、高いサポートの期待を持っている対象と、ストレスの軽減に有効な対象とは異なるものである可能性を示唆するものである。しかし、それが何によるのか、たとえば単に標準偏差の度合いによるものか、あるいは、サポート源の特別な作用があるのか、今後、検討する必要がある。

引用文献

- Dubow, E. & Tisak, J. 1989 The relation between stressful life events and adjustment in elementary school children: The role of social support and social problem solving skills. *Child Development*, 55, 440-452
- Furman, W. & Buhrmester, D. 1989 Children's perceptions of the personal relationships in their social networks. *Developmental Psychology*, 21, 1016-1024.
- 森和代・堀野緑 1992 児童のソーシャルサポートに関する一研究 *教育心理学研究*, 40, 402-410。
- 久田満 1987 ソーシャルサポート研究の動向と今後の課題 *看護研究*, 20, 170-174。
- House, J. S. 1981 *Work stress and social support*. Adison-Wesley
- 川西陽子 1995 セルフ・エスティームと心理的ストレスの関係 *健康心理学研究*, 8, 22-30。
- 神田信彦 1993 子ども用一般主観的統制感尺度の作成と妥当性の検討 *教育心理学研究*, 41, 275-283。
- 森和代・堀野緑 1993 絶望感に対するソーシャルサポートと達成動機の効果 *心理学研究*, 68, 197-202。
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 *教育心理学研究*, 41, 302-312。
- Reid, M., Landesman, S., Treder, R., and Jaccard, J. 1989 My family and friends: Six-to twelve-year-old children's perceptions of social support. *Child Development*, 60, 896-910。
- Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80 (Whole No. 609), 1-28。

付 記

本論文の構成にあたり、與世山かおり氏の協力を得た。記して謝意を表す。